

## ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	社会課題探究コース			訪問国	ニュージーランド
学校名	静岡県立静岡高等学校	氏名	望月咲杜	学年	2年

探究テーマ 日本の子どもの幸せとは。必要な法律、制度はあるのか？

ニュージーランドのパパモアにある街で約3週間ホームステイをしながら、現地高校及び空手道場へ通い、子どもたちの生活を実際に体験することで、日本とNZとの生活習慣や制度として子どもを守る仕組みの差異を明らかにし、少子高齢化が急速に進行する日本の現代社会において、子どもたちの幸せを守る方法を探究するものである。今回の探究課題を通してさらに貴重な存在となる子どもに対するコミュニティとしての扱い方、幸せの見つけ方、存在意義とそれらに絡んでくるであろう各民族の市民意識の差異について探究を行なった。



〈ホームステイ&キッズセンター〉

8歳の息子がいる親子3人の家庭に、約3週間ホームステイし、主にNZの生活リズムや市民意識を調査した。9歳以下の子どもを一人にさせないという制度を家庭の仕組みとして守っていくために、日本が著しく傾く傾向のある仕事重視ではなく、子どもを第一に考え、仕事は家庭の次という意識が感じられる様な生活をしていた。また民間が経営しているキッズセンター（日本でいう放課後児童クラブ）は放課後の一人の時間をなくす良い制度であり、日本の行政が行なっているものよりも自由度があり、地域として子どもを持つ親を支える仕組みが構築されていた。

### 〈パパモアカレッジ&空手〉

実際の登校方法や放課後の一人での時間の使い方を探究し、問い解決への一歩にするため、語学学校ではなく現地の学校へ行き、各年齢層、民族の生活リズムを調査、体験した。私が訪れた空手道場は、夕方から道場を開け、様々な年代の人が稽古に励むため利用することで、子どもを一人にしないようにしている家庭もあるそうだ。日本にもスポーツクラブ等は多く存在する。では違いはなにか。学校から直通で道場へバスが通っていることだ。それに伴い互いの文化交流を行うこともできたため、とても満足だった。

また、登下校方法も日本とは大きく異なり、学校には独自のバス、バス停システムがあり、子どもをできるだけ集団で下校させる様な仕組みになっていた。日本に比べて、保護者の仕事が終わるのが早いため、帰宅の際も多く乗用車がバス停に停まり、バス停から自宅へ子どもの送迎を行っていた。



### 〈最終結果〉

ニュージーランドにおける子どもの留守番に関する法律や制度を日本で用いることで、子どもの安全は以前より確保されるかもしれない。しかし日本人は仕事に過度に傾いている、そのような社会において厳しく規制を課すことは働けなくなってしまうシングルの保護者がいると思った。制度の施策よりも現在急速に少子高齢化が進行しさらに大切な存在となる子どもたちに対する我々の市民意識を変えることが最も重要であると思った。また日本に比べてニュージーランドは圧倒的に民族の数、総数共に多いと感じた。元来文化が全く異なり子どもへの扱方や日常の異なるコミュニティの中では今回探求したようなより厳しい法律が施行されているのかもしれない。その点日本とはコミュニティを構成する要素が違い、民族性が大きく問題を左右していることが分かった。

### 〈これから〉

今回、日本、ニュージーランドでの法律と市民意識との関係について興味をもった。日本において、貴重な存在となる子どもと法の探究を続けると共に、各民族のもつ市民意識についてもこれから深め、その因果関係、ひいては特定民族に対し効果的な法律を導き出すような仕組みをプログラムできるよう、情報収集の第一歩に努めたいと思っている。